



がん体験者の話に耳を傾ける田中住職(左)＝3日午後、益子町益子の西明寺

益子 西明寺でメディカル・カフェ

末期がん・田中住職が主催、傾聴

患者の不安語らい緩和

がん患者らがお茶を飲みながら、病の悩みなどを語り合うメディカル・カフェ「癌患者語らいの集い」が

3日、益子町益子の西明寺で初めて開かれた。主催者寺境内の普門院診療所医師でもある田中雅博住職(70)は自らも末期がん。抗がん剤治療が功を奏し永らえたが「本来、今頃は死んでいるはずだった」。ライフワークは、生と死に向き合い死の苦痛を和らげる活動。それを実践するメディカル・カフェを毎月開くつ

もりだ。「あと何回出席できるか分からないが、思い悩む人のため続けたい」と力を尽くす。

2014年10月に膵臓がんが見つかった田中住職は一時、病状から「どんなにもつても16年春まで」と考えていたが、奏功率20%の抗がん剤治療が効果を上げた。「平均5カ月は抗がん剤が効き、生きられる」

筆などに取り組む。癌患者語らいの集いは、

田中住職は宗教と医学を組み合わせた「臨床宗教師」として、全国から集まるがん患者の緩和ケアに当たった。

転移がんと闘う足利市朝倉町2丁目、無職高田久さん(77)は「かつて病気がら目を背け逃げていた。今では『死』を認めることで心が落ち着くようになって」と吐露。集い後、「患者の抱える悩みは共通していることが分かった」と胸をなで下ろしていた。

集いは、毎月第1日曜日から午後2時から開かれる。(近藤圭佑)

1998年に骨肉腫によって左足を太ももから切断したという宇都宮市住吉町、無職増淵完司さん(64)は「えたいの知れない不安が付きまとう。『死』が頭に浮かび気持ちが沈む」と打ち明けた。住職は「人生は物語。完成させていくことが大切」と答えた。